

ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照

大塚行誠 (大阪大学)・倉部慶太 (東京外国語大学)

1. はじめに

ティディム・チン語とジンポー語は、去辞と来辞を発達させた言語である。本発表では、これらをまとめて方向接辞と呼び、形態と機能の観点から考察する¹。

2. 方向接辞の形態と移動表現

以下、両言語における動詞複合体のおおまかな構造を示す。ティディム・チン語の去辞 va^3 -と来辞 $oŋ^1$ -は、どちらも動詞の前に現れる接頭辞である(大塚 2009)。一方、ジンポー語の去辞 $-s$ と来辞 $-r$ はともに動詞の後に現れる接尾辞である。

(1) ティディム・チン語における動詞複合体の構造

(人称)=(方向接辞)-(相互/再帰)-動詞=(助動詞)=(法・数・人称)

(2) ジンポー語における動詞複合体の構造

動詞=(助動詞)-数-相-(方向接辞)-人称-法

チン語支の言語には、去辞と来辞のほか、上下移動の表現に特別な文法標識を用いるものもある (Chhangte 1986:102-104, So-Hartmann 2009:283-291, VanBik 2017)。ティディム・チン語の場合、上方は $=tou^3$ 、下方は $=suk^3$ 、水平方向は $=p^h ei^2$ という助動詞を動詞の後に付加して表す。一方、去辞 va^3 -と来辞 $oŋ^1$ -は動詞の前に付加される(例 (3) 参照)。但し、去辞は必須要素ではない。

- | | | | |
|--------------------------|---------|--------------------|---------|
| (3) a. (va^3-) pai^2 | $=ou^3$ | b. $oŋ^1-$ pai^2 | $=ou^3$ |
| (AND-) go^1 | $=IMP$ | VEN- go^1 | $=IMP$ |
| 「行きなさい。」(ティディム・チン語) | | 「来なさい。」(ティディム・チン語) | |

ジンポー語の方向に関する動詞複合体の要素には、動詞連続、助動詞、方向接辞がある。上下移動は、動詞連続や助動詞で表す。例えば、上方移動は、 $lùŋ$ 「上る」、下方移動は $ʔyú?$ 「降りる」、 $khɾàt$ 「下方へ」等を用いる。これらは動詞複合体の動詞スロットや助動詞スロットに生起する。一方、直示中心と関連する移動は方向接辞で表す。方向接辞は、相スロットと人称スロットの間に生起する。この範列的スロットの相違は方向接辞が他の方向要素と異なる特別な範疇に属する事を示している。方向接辞は数や人称等の屈折要素間に生起する点で、動詞体系により深く組み込まれていると言える。方向接辞は、去辞 $-s$ と来辞 $-r$ の二項対立を成す。例えば、直示動詞 sa 「行く、来る」は方向に関して未指定だが、方向接辞を用いる事で方向が指定される(例 (4) 参照)。

¹ ジンポー語のデータは、Hanson (1911, 1927) 等に記録された 19 世紀から 20 世紀初頭の変種を扱う。現代ジンポー語は言語接触により動詞語尾が単純化する傾向にあり、これに伴い方向接辞の使用範囲も制限される傾向にある。ティディム・チン語のデータは、Henderson (1965) の指摘する narrative style と colloquial style という 2 種類の文体のうち、colloquial style を扱う。narrative style における来辞は、常に $hoŋ^1$ - という形式で現れる。

(4) a. *sa-s-it-Ø*.

go/come-AND-2SG-IMP

「行きなさい。」(ジンポー語)

b. *sa-r-it-Ø*.

go/come-VEN-2SG-IMP

「来なさい。」(ジンポー語)

両言語の方向接辞は、形式と位置が大きく異なる。しかし、抽象的なレベルでは、次の2つの共通性を示す。即ち、両言語の方向接辞は、動詞複合体における独自の位置を持つ点で、上下移動等、他の移動範疇とは異なる特別な範疇を成している。また、両言語では方向接辞の動詞との相対的位置がミラーイメージとなっているが、方向接辞が人称範疇よりも動詞に近い位置に現れる点で共通している。

3. 去辞 (andative)

3.1. 去辞の基本義

ティディム・チン語の去辞 *va*³-およびジンポー語の去辞-*s* は、移動物が談話参加者の視点や領域から離れる物理的移動を表す(例 (5), (6) 参照)。

(5) *tut*³*na*² *va*³-*la*¹=*pak*³=*nij*¹ =*ei*³

seat AND-take¹=instantly=1SG.IRR =SP

「ちょっと向こうへ席を取りに行きますね。」(ティディム・チン語)

(6) *khokhám-wa* =*phé*[?] *sa* *tsun*=*dan-s-ù*[?]-*Ø*.

king-man =ACC go say=CON-AND-2SG-IMP

「行って王に言いなさい。」(ジンポー語)

ジンポー語はムード卓立型言語であり、動詞複合末尾に義務的ムードが範列的に現れる。去辞はムードとの共起制限を持ち、命令法でのみ用いられる。但し、通時的には、来辞と同様に、より広い分布を示していた可能性がある。

3.2. 去辞の派生義

ティディム・チン語と同系統にある、チン語支のミゾ語やライ語にも去辞にあたる *va*- ‘thither’ があり、派生義として、過度な変化や感嘆を表す事がある (Chhange 1986: 110-113, VanBik 2017)。しかし、ティディム・チン語の去辞 *va*³-にそのような派生の用法は見られない。*va*³-は、専ら物理的移動に関する事を示すと考えられる。談話参加者にとって思わしくない状態への変化であっても、去辞ではなく、来辞のほうを用いる事が以下の例 (7) から分かる。

(7) *a*¹*ma*[?]³ *oŋ*¹-*sia*¹=*se:m*¹*se:m*¹=*in*²*te*[?]¹

3SG VEN-bad¹=more=3SG.IRR

「彼はもっと悪くなっていってしまうだろう。」(ティディム・チン語)

ジンポー語のアスペクトは、変化 vs. 非変化の二項対立を成し、変化相は-s でマークされる。変化相標識-s は、移動の意味を表さず、動詞複合体の別のスロットを占めるが、その形式に基づくと去辞と通時的関係を持つと考えられる。変化相は直近の状態変化を表し、非限界事象 (atelic) において、開始・起動の局面をマークする。この局面は、去辞が示す視点から離れる物理的移動と意味的に結びつく(例 (8) 参照)。

- (8) *nyé? ʔà? tərá =thà? khom=ŋà-s-Ø-ay*
 1SG.GEN GEN law =LOC walk=CONT-CSM-3SG-DECL
 「(彼は) 私の法に従って歩き始めた。」(ジンポー語)

4. 来辞 (venitive)

4.1. 来辞の基本義

ティディム・チン語の来辞 *oŋʰ*-およびジンポー語の来辞-*r* は、移動物が談話参加者の視点や領域に向かう物理的移動を表す(例 (9), (10) 参照)。

- (9) *siŋʰhianʔ oŋʰ-kiaʔ=inʔteʔʰ*
 branch VEN-fallʰ=IRR.3SG
 「{私/あなた/私とあなた}の上に枝が落ちるでしょう。」(ティディム・チン語)

- (10) *naŋ =kóʔ ŋay dù-r-iŋŋ-ay.*
 2SG =LOC 1SG arrive-VEN-1SG-DECL
 「あなたのところへ私は着きました。」(ジンポー語)

4.2. 来辞の派生義

両言語とも、来辞は物理的移動だけでなく、時間的移動も表しうる。例えば、ティディム・チン語では、例 (11) に示すように、変化を表すほか、*oŋʰ-suakʰ* (VEN-bornʰ)「生まれる」、*oŋʰ-do:kʰ* (VEN-appearʰ)「現れる」等、発生や出現の表現にもよく来辞 *oŋʰ*-を用いる。ジンポー語の来辞も、例 (12) に示すように、発生、出現、変化を表しうる。

- (11) *tuaʔ ha:iʔ =pe:nʔ dam²dam²=in² oŋʰ-na:i²=ta:ʔ*
 DEM mango =TOP slowly=CONJN VEN-yellowʰ=PRF
 「そのマンゴーは、少しずつ黄色なくなってきました。」(ティディム・チン語)

- (12) *yáʔ naŋ =kóʔ ŋay dân-pru-r-iŋŋ-ay.*
 now 2SG =LOC 1SG appear-come.out-VEN-1SG-DECL
 「今あなたのところに私は現れました。」(ジンポー語)

ジンポー語の来辞は、受益方向(例 (13) 参照)や未来(例 (14) 参照)も表しうる。これは

Heine and Kuteva (2002:73-78) の示す COME TO > BENEFACTIVE, COME TO > FUTURE の文法化に即しており, 通言語的に珍しい事ではない。

- (13) *naŋ ŋay =phé? gəbugəra-ŋay =thé? jə-phriŋ-ya-na-r-ìnd-ay.*
 2SG 1SG =ACC happy-NMLZ =COM CAUS-full-BEN-IRR-VEN-2SG-DECL
 「あなたは, 私を幸福で満たしてくれるでしょう。」(ジンポー語)

- (14) *nánthe =à? dìnlà =ni ɽyùpmaŋ mù-na-mə-r-à?-ŋay.*
 2PL =GEN old.man =PL dream see-IRR-PL-VEN-3-DECL
 「あなた方の祖父たちは, 夢を見るでしょう。」(ジンポー語)

ティディム・チン語の来辞 *oŋ^l*-は, 他動詞文において, 文中の必須要素として現れる場合がある。例えば, 被動者, 受領者, 被使役者に談話参加者が含まれる場合, *oŋ^l*-を文中の必須要素として付加する(例 (15), (16), (17) 参照)。*oŋ^l*-を移動の方向を示す標識と捉えるのか, 被動者が談話参加者である事を示す標識と捉えるのかにより, 2通りの解釈が可能な事もある(例 (18) 参照)。

- (15) a. *kei^l oŋ^l-t^hei³=ni^lte²?*
 1SG VEN-know^l=2SG.IRR
 「あなたは私を知っているでしょう。」(ティディム・チン語)
 b.* *kei^l t^hei³=ni^lte²?*
 1SG know^l=2SG.IRR

- (16) *naŋ^l let^lsuŋ² xat³ oŋ^l-pia^l=iŋ³*
 2SG gift one VEN-give^l=1SG.REAL
 「あなたに, ひとつプレゼントをあげました。」(ティディム・チン語)

- (17) *a^lman³ kei^l la:i³ oŋ^l-sim²=sak^l*
 3SG.ERG 1SG letter VEN-read^l=CAUS
 「彼は私に本を読ませました。」(ティディム・チン語)

- (18) *oŋ^l-ne:^l =ou³*
 VEN-eat^l =SP
 「私のところに食べに来なさい。」「私を食べなさい。[民話の台詞]」(ティディム・チン語)

ティディム・チン語の増項機能を持つ接尾辞に *-sak³*, *-pi²?*, *-san³*がある。動詞類の語(語幹形式 II)に *-sak³*を付加すると被代行者, *-pi²?*を付加すると随伴者, *-san³*を付加すると被放置者がそれぞれ文の表す事象の参与者として加わる。その被代行者, 随伴者, 被放置者に談話参加者が含まれる場合も, *oŋ^l*-は文の必須要素として現れる(例 (19), (20), (21) 参照)。

なお、来辞 *oŋ^l*-は、*oŋ^l-va³*-の形式で去辞 *va³*-と共起する事がある(例 (20) 参照)。さらに、談話行為参与者不在時の行為を示す接頭辞 *na^l*-「話し手または聞き手がいない間に～する/した」(Henderson 1965: 97-99) と *oŋ^l-na^l*-の形式で共起する事もある(例 (21) 参照)。これらの *oŋ^l*-は物理的な移動の意味を表す標識ではなく、逆行に関する標識と見られる²(大塚 2009)。

(19) *lian³ =in³ kei^l oŋ^l-va:k³-pi²³*
 PN =ERG 1SG VEN-walk^{II}-ASS
 「リアンは私と一緒に出かけました。」(ティディム・チン語)

(20) *tua² ui^l oŋ^l-va³-ho:l³k^hiat^l-sak³=iŋ³ =ei³*
 DEM dog VEN-AND-drive.away^{II}-SUBS=1SG.REAL =SP
 「私は、その犬を君の為に向こうへ追い返してあげました。」(ティディム・チン語)

(21) *nu^l-ciŋ² =in³ naŋ^l oŋ^l-na^l-ta:i³-san³ =mo:³*
 aunt-PN =ERG 2SG VEN-NA-run^{II}-RELNQ =SP
 「チンさんは君を置き去りにして、走っていったという事ですね。」(ティディム・チン語)

5. 通時的起源

両言語における来辞はどちらも動詞由来と考えられ、Heine and Kuteva (2002: 70-71) の COME > VENITIVE に当てはまる可能性が高い。ティディム・チン語の来辞 *oŋ^l*-は、フォーマルな場面では、*hoŋ^l*-という形式でも用いる。Henderson (1965) によれば、*hoŋ* がティディム近郊のヴァルヴムでは動詞「来る」として用いられる (Henderson 1965: 113)。VanBik (2009) は、チン語支ライ語の動詞 *huŋ*「来る」を基に、PKC **huŋ* ‘COME’ を提示した (VanBik 2009: 191)。**huŋ* も *hoŋ^l*-と関連付けられるだろう。一方、ジンポー語の来辞-*r* は、TB の様々な語支で「来る」を表す動詞(例:アオ・ナガ語 *ra*, メイテイ語 *rak*, ブナン語 *ra*, マガル語 *ra*)と関連付けられる (DeLancey 1980:261-262)。ティディム・チン語の去辞 *va³*-と同根の接辞は、多くのチン語支の言語に見られる (DeLancey 1985: 372-374)。VanBik (2017) は、それらが PTB **s-wa* ‘GO’ に関連性を持つと指摘した。ジンポー語の去辞 *s*-も、PTB **s-wa* に由来すると考えられる (DeLancey 1980: 228, 戴 1996)。

6. まとめ

両言語はともに去辞と来辞に基づく方向接辞を発達させている。各言語における去辞と来辞の位置や形式は必ずしも対応しない。この事実はこれら方向接辞がそれぞれの言語において独自に発達した事を示唆する。ただし、両言語の方向接辞は、動詞複合体において特別な位置を占める点、人称範疇よりも動詞に近い位置に現れる点等、形態的な共通性も示す。また、両言語の方向接辞が通時的に動詞「行く」、「来る」に由来する可能性が高い点も共通している。

両言語を共時的に見る限り、去辞と比べ、来辞のほうが発達している点でも共通していると言える。ティディム・チン語の去辞は、文中の必須要素として現れる事がなく、特筆すべき派生義も持

²近隣言語ラルテー語にも来辞 *hoŋ*-があるが、専ら移動の意味を表し、このような派生用法は持たない (大塚 2016)。

たない。ジンポー語の去辞は、命令法でのみ去辞が用いられるという制限がある。

一方、ティディム・チン語の来辞は、文中の必須要素として現れ、物理的な移動を示す去辞との共起も見られる。ジンポー語の来辞は、去辞に見られるような制限がなく、どのような種類のムードでも現れうる。

略号

-: segmentable morphemes (separated by hyphens), =: clitic boundary, 1: first person, 2: second person, 3: third person, ^I: verb stem form I, ^{II}: verb stem form II, ACC: accusative, ALL: allitive, AND: andative, ASS: associative, BEN: benefactive, CAUS: causative, COM: comitative, CON: conative, CONJN: conjunction, CONT: continuous, CSM: change-of-state marker, DECL: declarative, DEM: demonstrative, ERG: ergative, GEN: genitive, IMP: imperative, IRR: irrealis, LOC: locative, NA: a prefix *na^I*- (Henderson 1965: 97-99), NMLZ: nominalizer, PKC: Proto-Kuki-Chin, PL: plural, PN: proper name, PRF: perfect, PTB: Proto-Tibeto-Burman, REAL: realis, RLNQ: relinquitive, SEQ: sequential, SP: sentence final particle, SG: singular, SUBS: substitutive, TB: Tibeto-Burman, TOP: topic, VEN: venitive.

参考文献

Chhangte, Lalnunthangi (1986) A preliminary grammar of the Mizo language (Tibeto-Burman). MA thesis, The University of Texas at Arlington. / 戴慶厦 (1996) 「再論景頗語の句尾詞」『民族語文』1996.4: 6-15. / DeLancey, Scott (1980) Deictic categories in the Tibeto-Burman verb. Ph.D. dissertation, Indiana University. / DeLancey, Scott (1985) The analysis-synthesis-lexis cycle in Tibeto-Burman: A case study in motivated change, in *Iconicity in Syntax*, ed. by John Haiman. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins, pp.367-389. / Hanson, Ola (1911) *Choi pra ai chyum laika: Ga shaka ningnan* [The Holy Bible: New Testament]. Rangoon: American Baptist Mission Press. / Hanson, Ola (1927) *Choi pra ai chyum laika* [The Holy Bible]. Rangoon: American Baptist Mission Press. / Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. / Henderson, Eugénie J. A. (1965) *Tiddim Chin, A Descriptive Analysis of Two Texts*. London: Oxford University Press. / Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. Berkeley: University of California Press. / 大塚行誠 (2009) 「ティディム・チン語における方向接頭辞 *óη-*」『東京大学言語学論集』28: 197-218. / 大塚行誠 (2016) 「ラルテー語の人称標示」『東京大学言語学論集 電子版 (eTULIP)』37(2): 19-28. / So-Hartmann, Helga (2009) *A Descriptive Grammar of Daai Chin*. Berkeley: STEDT, Center for South & Southeast Asia Studies. / VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages [STEDT Monograph 7]*. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project. / VanBik, Kenneth (2017) Directional Pre-verbal Particles in Hakha Lai. *Himalayan Linguistics* 16(1).

本発表で用いる音素表記(国際音声記号と異なる記号)

両言語: /c/ [tɕ], /ch/ [tɕʰ], /j/ [dʒ], /kh/ [kʰ], /ph/ [pʰ], /r/ [ɹ], /th/ [tʰ], /x/ [x ~ kʰ], /y/ [j], ティディム・チン語: /e/ [e ~ ε], /e:/ [ɛ:], /o/ [o ~ ɔ], /o:/ [ɔ:], /¹/ [ʌ] or [ɿ], /²/ [ɨ] or [ɪ] in a tone sandhi environment, /³/ [ʌ] or [ɨ]

本発表は科研費(課題番号 16H03414, 17H04523, 17K13442)の研究成果の一部である。